佐賀県文化財調査報告書第28集

佐賀郡大和町

西山遺跡

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第28集

佐賀郡大和町

西　山　遺　跡

佐賀県教育委員会

発刊に当って

職員研修所および教育センターなどの県の施設が，佐賀郡大和町川上の西山地区に建設されることになった。この地は，肥前国府の所在地に近く，肥前国一の宮であった淀姫神社とその神宮寺の所在地に隣接し，しかも建設地の一部には寺坊跡が存在することも予想されていた。建設予定地内における埋蔵文化財の調査について依頼を受けた県教育委員会は，この建設予定地内の発掘調査を48年８月から９月にかけて実施した。

調査を実施した地域の全面にわたって，遺物が散布していることが確認されたが，寺坊跡その他の遺構は確認されず，出土した遺物は中世から近世にかけての寺院関係のものがその大部分を占めている。これらの遺物は，中・近世における地方寺院の什器類の実体を知る上から価値が高いのみでなく，中・近世における資料の乏しい本県にあっては，その学術的意義も特に高く評価されるのではなかろうかと考えられる。

今般この遺跡の調査結果について，その概報を発刊することになったが，調査期間も十分でなく，また，この調査概報にも不備な点があろうとは思われるが，本県においてはこの種の報告書の刊行は初めてのことであるので，研究資料として活用していただくことを期待するものである。

本所を刊行するに当って，調査担当者や地元協力者のお骨折に感謝申しあげるとともに，この調査に対して終始協力と援助をたまわった関係機関の方々に厚くお礼申しあげる次第である。

昭和４９年３月

佐賀県教育委員会

教育長　瀬戸口芳夫

目　　次

１．発掘調査の経過 …… 1

２．遺 跡 の 概 要 …… 2

(1)地 理 的 環 境 …… 2

(2)歴 史 的 環 境 …… 3

(3)遺　　構 …… 6

３．遺 物 の 概 要 …… 9

(1)土　　器 …… 9

(2)石　製　品 …… 11

(3)そ　の　他 …… 13

４．総　　括 …… 14

図　　版 …… 15

1. 発堀調査の経過

佐賀郡大和町川上に佐賀県職員研修所および佐賀県教育センターが設立されることになった。この地は，肥前国一の宮であった淀姫神社およびその神宮寺としての性格を有する実相院やその末寺である明王院の西方に位置し，特に実相院や明王院に隣接した地域である。人事課長および教育研究所長の依頼によって，７月23日に建設予定地内の埋蔵文化財の分布調査を実施した。

調査参加者は，次のとおりである。

人　事　課

職員係長　石崎邦夫・主事　大西憲治

教　育　研　究　所

指導主事　庄島奎介・研修員　櫻井直男・研修員　田中照

文　化　課

文化財調査監　木下之治・社会教育主事　木下巧

調査の結果，土師系陶質土器片・須恵系陶質土器片・瓦器片・瓦片・青磁片・陶磁器片などが，建設予定地域のほぼ全域にわたって分布していることが確認された。また，淀姫神社の神宮寺を中心とする河上山の寺院や僧坊などの寺坊跡もこの地域に所在しているのではなかろうかということが推定された。この調査結果について，関係機関へ報告し，工事着工前に発堀調査を実施する必要があることを伝えた。

人事課および教育研究所は，この報告にもとづき，発堀調査の実施を県教育委員会に依頼した。そこで県教育委員会は，８月20日から９月21日まで約１か月間にわたって，県文化課の係が中心となって発堀調査を実施した。

調査担当者は，次のとおりである。

木下之治・山本弘道・木下巧・藤井要・天本洋一（以上文化課）

調査協力者

石隈喜佐雄（文化課）・大隈悟（県遺跡調査員）・尾形徳之（県遺跡調査員）

2. 遺跡の概要

（1） 地理的環境

発掘調査を実施した地域は，佐賀郡大和町川上で，字名は，西山・西山三割・西山四割・西山五割・西山六割・西山十一割・西山十二割・宮原・惣房口・惣房口一割・惣房口二割・惣房口三割・惣房口四割・惣房口五割・星熊一割・星熊二割・星熊三割にわたっている。地目は，水田・畑・山林・原野・雑種地からなり，総面積は40.112㎡に及んでいる。

佐賀平野の北に東西の方向に脊振山系が連なっているが，その中の標高 845mの彦岳の東山麓，標高30～25mのところにこの調査地域は位置し，東方 225mのところを河上川が南流している。また，東側北寄りに実相院，東側に明王院が隣接して所在している。調査地域の北と西および西南の方向には尾根が張り出して調査地域を包み，調査地域の北側中央部分にも尾根の末端が入り込んでいるため，調査地域は３つの地形に分割されている。すなわち，北側中央の丘陵末端の台地，この台地の東側の低湿地，台地の西側から東南へのびる谷状の部分の３地形であって，この谷状の部分が最も広い面積をしめ，谷の上方は権現谷，下方を西山と一般に呼んでいる。北側の中央部に張り出している台地を除いて，他の谷の部分は一般に低湿地であり，水田であったが，近年大半は密柑園となっている。

この密柑園造成に当って，排水のために相当に土地の改良が実施されたらしく，そのため谷の部分に遺構が存在していたとすれば，その大半はその土地改良のため破壊されたのではないかと推定される。その破壊を物語るかのように，この谷の部分の密柑園の表土には各種の土器片や陶磁器片などが，相当に濃密に分布している。

この調査地域の地質は，シラス状を呈し，地層の中に鉄分を多量に含有する薄い鉄板状の層が嵌入している。特にこの調査地域の西北部の一部には，この鉄板状の層が複雑に嵌入して，特殊の遺構ではないかと思われるような形状を呈している。地元の人の言によれば，この地方は一般に鉄分が多く，井戸水は飲料に適さないとのことである。地層中に鉄分が沈澱して，鉄板状の地層となって嵌入している所は，本県内では他に例がみられない特色あるものである。この地域には，現在寺院や坊舎などはもとより一般の住家も存在していないが，実相院に隣接していることや，権現谷・惣房などの地名などからして，廃寺跡などの所在することが予想されたのである。しかし，この調査地域および隣接地において発掘調査が実施されたことはなく，また，出土品などについても明らかにされたものは皆無にひとしい現状である。

（2）歴史的環境

佐賀平野を貫流する最大の河川である河上川の流路が，山間の渓谷を出て平地に流入する山麓から平地への漸移地帯には，銅戈が出土し支石墓が所在する大和町尼寺の南小路弥生遺跡や，夔鳳鏡・方格規矩鏡などが出土した大和町川上の十三塚石棺墓をはじめとして，弥生時代の遺跡が点在している。しかし，この地域においては，古墳時代以後の古代遺跡の占める比重が極めて大きく，古代遺跡の分布は極めて濃密である。

この地域は前方後円墳をはじめとして，大小古墳の密集地帯を形式し，肥前国における古墳文化の中核地帯となっている。また，歴史時代に入ると，肥前国府がこの地に設けられて，肥前国における政治・文化の中心地となった。要するに，この地域は古墳時代以後における肥前国の中心地として繁栄したところであり，この歴史的位置を反映して，この地域には古代の遺跡が濃密に分布しているということができる。

イ，古墳時代の遺跡

河上川の西側に，船塚・小隈などの前方後円墳があり，東側に築山・前隈山・銚子塚などの前方後円墳が分布している。とくに，船塚と銚子塚は主軸の長さ100m余り，周濠をめぐらした肥前国内では最大の前方後円墳として注目される。

群集墳としては，久池井の礫石古墳群・久留間の男女山古墳群・川上の星隈山古墳群・久留間の西野古墳群などがあったが，古墳群の大半は密柑園造成のため破壊され湮滅してしまっている。

円墳として注目されるものには，都渡城の高畠古墳･久池井の森の上古墳･川上の小隈古墳などがある。高畠古墳（松尾禎作「都渡城高畠古墳」昭和24年5月31日発行，佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第8輯）は，竪穴式石室を内部主体とする円墳で，副葬品としては鉄鏃・鉄斧・鉄鎌・紡錘車･仿製の内行花文鏡・鹿角製刀装具などが出土している。森の上古墳（松尾禎作「森の上古墳」昭和24年5月31日発行，佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第8輯）は，箱式石棺を内部主体とする円墳で，竹櫛・琴柱形石製品・変形文鏡・刀子・鉇などの副葬品が出土しているが，竹櫛や琴柱形石製品は県内では他に例を見ないものとして注目される。小隈古墳（木下之治「佐賀県大和村小隈古墳調査報告」考古学雑誌第44巻第3号）は，内部主体が4個の箱式石棺からなる円墳であって，仿製の内行花文鏡・管玉・勾玉などの副葬品が出土している。

山麓から平地への漸移地帯には，到るところに土師器や須恵器の破片の分布がみれれ，古墳時代の住居址をはじめとする遺跡が濃密に分布していることが推定される。この地域における古墳時代の遺跡の濃密な分布は，古墳時代におけるこの地域の開発

の著しい進歩を物語るとともに，古墳時代にはすでにこの地域が肥前国の中心地的位置を占めていたことを暗示しているのではなかろうか。

ロ，歴史時代の遺跡

河上川の右岸の山麓地帯に肥前国府が設けられているが，その遺跡の範囲などは明らかでなく，印鑰社が鎮座し，惣座(総社)・庁の坪などの地名などに，国府の名残りをとどめているにすぎない。国府推定地の南方に，肥前国分僧寺跡および尼寺跡がある。また，河上川の西の大願寺部落に，重弧文や単弁瓦などを出土する奈良朝寺院跡である大願寺廃寺跡がある。この地域に鎮座する神社としては，肥前国一の宮である延喜式内社の淀姫神社，国史現在社の金立神社・甘奈備神社などがある。その他，大願寺の真手山からは滑石製経筒が出土し，小隈からは蔵骨器が2個出土している。

ハ，文献に現われた当地方

〔肥前風土記〕

佐嘉郡　　郷陸所，里十九，駅壱所，寺壱所

むかし，樟樹1株この村に生ゆ。幹枝秀でて高く，茎葉繁茂し，朝日の影は杵島郡浦川山を蔽い，暮日の影は養父郡草横山を蔽う。日本武尊巡幸の時，樟の茂栄しているのを御覧になり，勅して，此の国を栄国と謂うべしとおおせられた。因て栄郡という。後に改めて佐嘉郡と号す。

一にいう。郡西に川有り，名づけて佐嘉川という。年魚これ有り。その源は郡の北の山より出て，南流して海に入る。この川上に荒神あり,往来の人半ば生き半ば殺しき。ここにおいて，県主等の祖大荒田，占い問う。時に土蜘蛛大山田女・狭山田女の二女有りていう。下田村の土を取り，人形馬形を作ってこの神を祭祀すれば，必ず応和有りと。大荒田すなわち其の辞にしたがい，この神を祭る。神この祭を歆し，遂に応和す。ここに於て，大荒田いう。

この婦この如くに実に賢女なり，故に賢女を以て国名となさんと欲す。因て賢女郡という。今，佐嘉郡というのは訛れるなり。

また，この川上に石神有り，名づけて世田姫という。海神年ごとに，鰐魚という。流れに逆いて潜上し，この神所に到る。海底の小魚多く之に相従う。或は人その魚を畏れ，そこなうなし。或は人捕食すれば，死す有り。凡そこの魚等，二三日とどまり，還りて海に入る。

〔日本霊異記〕

大安寺の僧戒明が九州の国府に大国師として遣わされた時，宝亀七・八年の頃，肥

前国佐嘉郡の大領，正七位上佐嘉君児公は安居会を催し，戒明法師を招いて八十巻の華厳経を講義させた。

二，淀姫神社と実相院

川上川の清流のほとりに鎮座する淀姫神社は，淀姫大神を祭神する神社であって，河上神社とも称されている。佐賀郡富士町の淀姫神社や佐賀市の本庄神社および与賀神社などとともに，河上川流域に鎮座する淀姫神を祭神とする神社の一つであって，古来肥前国一の宮として崇敬されてきた神社である。

寛治5年（1091）8月に当社の社僧円尋が，一宇の房舎を建てて河上別所と称した。この房舎は円尋の門弟が相承して次第に栄え，おそくとも鎌倉時代の終り頃までには，神宮寺にとって代って河上山神護寺と称するに至ったと推定されている。その山主は，河上山座主と号し，大宮司とともに，淀姫神社の社務も分担した。南北朝時代ごろから神通寺と称され，室町時代の中期以降は，河上山実相院と称して今日に至っている。

江戸時代の天明8年（1788）12月の寺社差出「真言宗由緒」には，次のように記されている。

一、御室御所仁和宮御末寺古義真言宗実相院

一、勅願之字写

大日本国鎮西肥之前州第一鎮守宗廟

正一位川上淀姫大明神　第一宮

一、社内小社

若宮社　香椎宮　住吉宮　王子宮　淀姫宮　稲荷宮　加茂宮　春日宮　高良宮

山王宮　乙宮社　宝満宮　代永宮　竈川宮　志賀宮　阿蘇宮　百代宮

右十七社何も御修覆所也

一、河上山坊中衆徒

大門坊　観音院　竹内坊　光明院　円通寺　宝珠院　学頭坊　菩提院

理趣院　明王院　二楷坊

右十一ケ寺河上社御社参之節は御目見相遂候

一、同社家中

惣命婦　二之命婦　百代命婦　代永命婦　住吉命婦　淀姫命婦

王子命婦　竈川命婦　大宮司千葉近江　同宗島左内

一、同社人中

永山浅右衛門　笠原長右衛門　山田彦右御門　戸上九右衛門　徳永孫左衛門

古川清秀　高森権之進　高森八之進　他に，宗氏　内山氏　釘本氏

右三家只今家主無之候

一、同山山伏　　玉葉坊

（3）遺　　構

調査地域の全域を次のように，4区に分けて発掘調査を実施した。

1　区――西北から東南の方向へL字状に傾斜して，谷を形成しているが，この谷の上方，すなはち西北方に当るところを，1区とした。この1区は，西側に尾根の末端がのびてきている部分がある以外は，低い谷を形成していて，現在は密柑園となっているが，かっては水田であったところで，水位は比較的に高い。

2　区――北側の中央部に尾根の末端が張り出し，台地状の地形を呈している部分であって，北から南へ傾斜し低くなっていっている。元来畑地であったということであるが，荒野と化してしまっていて，調査地域では，最も高燥なところである。

3　区――1区に接続する谷の下方で，この調査地域では最東南に当っている。低湿地帯であって，かっては全域水田であったといわれるが，現在では一部が密柑園となっている。

4　区――2区の東側に隣接し，調査地域の東北端に当っている。この4区も北から南へ走向する狭い谷を形成していて，水田となっている。水位が高く，湿潤地帯となっている。

江戸時代の天明8年（1788）の寺社差出には，河上山坊中として11か寺が記されているが，この中現存しているのは，調査地域の東側に隣接している明王院1か寺にすぎない。しかし，調査結果は，寺院跡としての遺構を明らかにすることはできず，また，住居址や墓地などの遺構も発見されなかったが，古窯跡1か所，遺物を相当豊富に包含していた不明遺構4か所が発見された。

〔1区の遺構〕

この1区には，地層中に鉄分が沈澱して鉄板状の薄い層が見られる部分があって，特色ある地層を形成している。この1区で遺物を多数出土し，遺構らしいものが認められるのは，AトレンチとCトレンチの2か所である。

A――東西の方向にトレンチを設定して調査に当ったが，中央の方へ向かって基盤層は次第に低く傾斜し深くなっている。この地層が深くなっている部分の現地表下1．3m付近から木・竹片を含有する黒色の腐蝕土層となっている。この腐蝕土層中から土器片が相当数出土したが，近世の陶磁器片を含まず，ほとんど同一形式の土器である点が注目される。しかも，この腐蝕土層の上端に，鉄分層が鉄板状に嵌入していて，後世の遺物の混入を防止している点も見のがすことができない。

この腐蝕土層の最下層は明らかにすることができなかったが，現地表下２ｍ以上に及んでいることは確実である。この腐蝕土層の部分は，かつての谷川であったと推定され，木柱の基部２本と木柱穴１カ所が発見された。木柱は径12cm余りであって，ここに洗場が設けられていたのではないかと推定される。

C――東西に設定したトレンチの東端付近に,径３ｍ余りの黒色の落ち込み層があり，現地表下 1.3ｍ余りの深さまで続いている。この黒色土層中からＡトレンチと同形式の土器とともに，近世の陶器片，それに滑石製品など多数の遺物が出土した。中間層に径30～40cmの塊石が不整形に堆積し，この堆石中やその下層にも土器片などの遺物が混入されていた。

この黒色土層中の遺物は，単一時期のものでなく，各時期の遺物が混入していることが認められる。この遺構の性格は明らかでないが，しいて類推すれば，一種のゴミ棄場的なものではないかと考えられる。陶器片は，比較的に上層から出土し，下層の遺物はＡトレンチ出土遺物と同形式である点からみて，上層の遺物は後世の混入であり，Ｃは元来Ａとほぼ同一年代の遺構ではないかと推定される。

１区からは，ＡとＣの２カ所から遺構と推定されるものが発見され，しかもこの２カ所の遺構は同一年代のものであろうと推定された。この２カ所の遺構からみて，この遺構の近くに寺坊跡などの存在が推定されるのであるが，その遺構の存在を確認することは，遂にできなかった。

〔２区の遺構〕

２区は，北から南へ張り出した丘陵の末端に位置し，小台地を形成している。この２区の東と南は低くなり，西北部が最高処となっている。この２区から遺物が多数出土したところは，東西の方向に設定したＤトレンチのほぼ中央とＡトレンチの中央やや西寄りの２カ所である。

この２区の西北部の高所は，天明８年の寺社差出に見える「川上山坊中」11カ寺の中の大門坊の跡であると伝えられている。出土した遺物からは寺坊跡の存在が推定されるが，その遺構を明らかにすることはできなかった。

A――現地表下約40cmのところに１個の扁平巨石があり，その近くから陶磁器片を主体として相当数の遺物が出土した。しかし，遺構については手がかりがなく，この巨石も基盤上にあって，支石墓その他の遺構，または寺坊関係のものとは考えられず，単なる自然石であろうと推定される。

D――西北部の最高所から東側へ傾斜して低くなるその傾斜面に，５×３ｍ余りの範囲にわたって，深さ 0.8ｍ余りの黒色土層が堆積している。この黒色土層は，木炭を

多く含んでいて，大部分は灰層であろうと推定される。この灰層中に多くの完全土器とともに，鋳造製仏像・貨幣・瓦・石塔婆などの遺物が包含されていた。この黒色土層の西側に，不規則に配置された塊石群がある。ここの一帯が大門坊の跡ではないかと推定されるが，寺坊の遺構を明らかにすることはできなかった。黒色土層は，その出土遺物からみて，大門坊跡を始末した際の棄場ではなかったかと推定され，大門坊は火災にあって焼失したのではないかとも考えられる。

大門坊は，天明８年までは存在していたことが，寺社差出によって知られるのであるが，廃寺となった時期は明らかでない。しかし，出土した寛永通宝・乾隆通宝や磁器片などによって江戸時代末期ごろではなかろうかと推定される。また，この大門坊が創建された時期も明らかでないが，鋳銅製の仏像１体は室町時代と推定され，石造宝篋印塔の屋根の部分は天文～天正期ごろのものではないかと推定されるので，室町時代後期ごろの創建ではなかろうかと考えられる。また，出土した瓦は，軒先瓦２個体分と他に平瓦および丸瓦が若干あったが，その数は多くない。おそらく他の場所に棄てたのではないかとも考えられるが，付近一帯からは瓦片は全然出土しなかったところからみて，他の建物に転用するために運び去られたのではなかろうか。

しかし，この場所を寺坊跡として考えた場合，最大限に見積って25×30ｍの建坪面積であって，寺坊の規模も大体推定されるのではなかろうか。廃寺となったこの大門坊の遺瓦が他に転用されたとしても，出土した遺瓦が余りに少ないところからみて，おそらく建物の本体の部分は草葺で，庇か下屋などの一部に瓦が使用されていたのではないかと推定される。

〔３区の遺構〕

３区は，最も広い面積を占めているが，大部分は低湿地である。近世の陶磁器片や土器片などは，ほとんど全域から出土しているが，遺構が確認されたのは８トレンチ内から発見された窯跡１か所のみである。

この窯跡は，地面を僅かばかり掘りくぼめて造った平窯跡であって，４×３ｍ余りの楕円形に近いプランで，深さは10cm内外である。窯跡内には木炭や灰を堆積していて，その中に多くの土器を包含していた。この土器は，１区Ａ出土の土器と同形式である点が注目され，１区Ａ出土の土器は，この窯で焼成されたものではなかろうかと推定される。

県内から発見されている平窯跡の例は極めて少なく，この遺跡の東南方に位置する大和町柿園の国分寺瓦窯跡および小城郡小城町久蘇遺跡の平窯跡などが明らかにされているにすぎない。しかし，築窯年代から見て，この遺跡の窯跡に近いものは，久蘇遺跡の窯跡１例にすぎない。

3. 遺物の概要

(1) 土　　器

〔1区A出土の土器〕

木竹を包含する腐蝕土層中から出土した土器の一群であって，この腐蝕土層の上に鉄板状の鉄分沈澱層が嵌入しているため，陶磁器片等の後世の遺物は混入せず，一定年代の遺物の包含であることが推定される。しかし，ここからの出土土器は，破片のみであって，復元可能なものもその数が極めて少なく，また，土器以外の遺物は出土していない。この場所は，深く侵蝕されている点からみて，谷川が南へ流下していた跡ではないかと考えられ，洗場の支柱らしいものも残存している。ここに包含されている土器片は，上流から流れ込んできたものか，またはここに遺棄されたものであろうと推定される。

出土した土器は，土師質と瓦器の2系統からなり，器形は椀形・小皿形・浅鉢形の3種類に分けられる。土師質の器形は，主として小皿形・浅鉢形で，瓦器は椀形である。

土師質の小皿形や浅鉢形の土器には，高台がなく，すべて平底である。この平底には，糸切り底のものもあるが，糸切り底の痕跡を残しながら平行線状に板目痕がついているのが多い。

瓦器には，平底のものもあるが，その大部分は高台付である。胎土は精選され，器面は磨研されていて，器形も整っている。

この遺構内から1片ではあるが，黒陶片が出土しているのが注目される。この黒陶片は，口縁部であって，磨研され黒色を呈している。県内における黒陶の出土例は極めて少なく，鹿島市儀助平洞穴（昭和48年1月30日，鹿島市教育委員会発行）からの出土が報告されているにすぎない。

〔1区C出土の土器〕

黒色を呈する落ち込み土層中から出土したもので，上層には近世の陶磁器片が混入していた。下層から滑石製の石造品と伴出した土器には，土師質と瓦器の2種類があって，同じ1区のA出土の土器類と同形式である。土師質の土器は，浅鉢形のものが多く，口径14.3cm，高さ 2.9cm，底面径 9.0cm余りのものが主流をなし，高台はつけられていない。口縁部は僅かばかり外反りするのが多く，淡黄色または黄褐色を呈している。底部は糸切り底のままのものもあるが，平行板目文が付いているのが多い。外側にはロクロ痕を残しているが，内部はなでつけで整形されている。

瓦器は，高台付の椀形が大部分で，口径16.5cm，高さ 5.5cm，高台径 8.5cm余りである。胎土は精選され，内外ともによく磨研されていて器面は平滑であり，灰黒色または暗灰色を呈する。

〔2区A出土の土器〕

自然石の巨石付近から近世の陶磁器片や土師質土器片などが相当数出土したが，体をなすものはほとんどなかった。ここから出土した土器の中で注目されるものは，大形の煮沸容器である。口径36cm，高さ14cm余りと推定され，大形の鉢形を呈し，底部は平底に近く，立ち上がりは垂直に近くて，口縁部が僅かばかり外反りしている。厚さは僅か7mm余りで，薄手であり，2孔の吊手が2か所につけられているのと，吊手のないものとの2種類がある。底部には煤が付着していて，この土器が煮沸容器であることを物語っている。この土器は，瓦と同質のものであって，江戸時代の器物に散見される瓦窯製品の1つであろう。

〔2区D出土の土器〕

木炭や灰を多量に含有する黒色土層中から，鋳銅製の小仏像・瓦・貨幣・陶磁器片などの遺物とともに多数の土師質土器が出土した。この土器は，完全品が相当数にのぼっている点からみて，故意に遺棄されたものであろうと推定される。

この土師質土器は，淡黄色を呈し一部に黒色の斑点が見られるものもある。器形はほとんど皿形土器であって，糸切り痕のある平底である。大きさからみると大小の2種類に分類されるが，その形状には僅かずつの差異が認められる。

〈大形皿形土器〉

口径9cm，高さ 2.4cm，底径 4.6cm，やや厚手であって，口縁部が僅かばかり内側へ弯曲している。（1式）

口径 8.4cm，高さ 1.6cm，底径 4.0cm，口縁は篦削りで不整形。焼成時におけるひずみが大きく，亀裂が見られるものもある。（2式）

口径8cm，高さ 2.8cm，底部 4.7cm，厚手で，底部は少し凹面を呈する。（3式）

口径 7.8cm，高さ 1.7cm，底径 4.6cm，口縁部が僅かばかり内弯する。厚手で，底部に僅かばかり段を形成している。（4式）

〈小形皿形土器〉

口径7cm，高さ 1.8cm，底部 3.2cm，厚手で口縁は篦削り，底部に僅かばかり段を形成する。（1式）

口径 6.5cm，高さ 1.5cm，底径 3.3cm，薄手でひずみがあり底部に段を形成する。（2式）

口径 6.8cm，高さ 1.5cm，底径 3.4cm，薄手で，口縁は篦削り。（3式）

口径 6.5cm，高さ 1.8cm，底径 3.8cm，厚手で底部に段あり。（4式）

口径 6.6cm，高さ 1.5cm，底径 4.3cm，厚手で底部が広く底部内側は凹面を呈す。(5式)

口径 6.0cm，高さ 1.4cm，底径 4.2cm，厚手で底部が広く口縁部は僅か内弯する。(6式)

口径 7.2cm，高さ 1.6cm，底径 3.9cm，厚手で口縁部は不整形，底部に段を形成する。(7式)

口径 6.9cm，高さ 2.3cm，底径 2.5cm，胎土は精選され，薄手。口縁部は大きく外反りし，底部が小さい。（8式）

〔3区8，窯跡出土の土器〕

1区A・C出土の土師質土器と同形式のものであって，鉢形と皿形のものが出土している。皿形土器は，形態上大・小の2種類に分類することができる。

〈鉢形土器〉

口径16.3cm，高さ 3.4cm，底部 9.7cm，黄灰色を呈し，口縁部は僅かばかり外反りする。底部には板目の平行線文がある。

〈皿形土器〉

口径11.3cm，高さ 2.2cm，底部 7.4cm，淡黄色また灰黄色を呈し，口縁部は僅かばかり外反りする。(大)

口径 9.4cm，高さ 1.3cm，底径 6.2cm，灰黒色・褐色または淡灰色を呈し，口縁部は僅か外反りし，底は浅い。底部に板目の平行線文がある。(小)

（2）石　製　品

石製品には，舟形模造品・硯・仏像・石塔婆などがあり，出土地は1区Cと2区Dの2か所である。

〔1区C出土品〕

黒色の堆積土層中から土師質土器などとともに共伴したもので，舟形模造品と硯の2例である。

〈舟形模造品〉

滑石製であって，全長11.0cm，最大幅 5.0cm，長楕円形の匙形を呈していて，深さは 1.2cmである。匙形の柄と身の境目にくびれがある。その形態からみて，舟の模造品と考えられるが，その用途とともに確証はない。

背面は，弧を描き煤が付着している。この形態からみて，滑石製経筒か石鍋などの破損したものを用いて模造品を製作したものではないかと考えられる。平安

時代から鎌倉時代にかけてのものではないかと推定される土偶が2個，佐賀市久保泉町川久保の狐隈から出土し，小城郡小城町晴気の寺浦からは土製犬が出土している。この滑石製模造舟もこれらの出土品と同じ性格のものであって，一種の祭祀用遺物ではないかと推定される。

〈硯〉

滑石製に類似した石材で，ほぼ半分余りを欠損しているため，その全貌は明らかでない。残存部分は，長さ 6.5cm，頭部の幅 6.5cm，残存部端の幅 8.3cmで，頭部から次第に広くなっている点からみて，風字硯の形式をとどめていたのではないかと推定される。縁の幅 0.6cmで狭く，ウミの最深部の深さ 1.2cmでゆるやかに傾斜している。残存部の端に，方形の深い堀り込みが見られる。

〔2区D出土品〕

木炭・灰の堆積土層中から各種の遺物が出土したが，この中から石仏1体が発見され，この土層の西側至近の場所から宝篋印塔の屋根および石塔婆の宝珠の部分が出土した。

〈石　仏〉

扁平な板状の滑石板に，如来形の仏像が浮彫りされている。12×11cm余りが残存する破片であって，頭部から胸部の一部にかけての部分が残存しているのみである。頭部には幅の広い頭光が浮彫りされていて，背面に「大日本（以下不明)」の毛彫り銘がある。

垂直に近い彫法に，中世的な技法がうかがわれるが，「大日本」と称した遺物は本県内では，いつ頃からみられるか，これがこの像の彫造年代を知る一つの手がかりとなるのではなかろうか。

〈宝篋印塔〉

屋根の部分であって，幅19cm，高さは12.5cmで小型である。段型は3段で，耳は段型より高く，僅かばかり外反りし，ゆるい弧線を描いて砲弾型に先端が尖っている。また，耳には1弧が陰刻され，この弧線から直角に外側に向かって陰刻の直線が1本刻まれている。下端には，蓮華文の代りに連続方形文がめぐらされている。県内の造立年代の明らかな宝篋印塔で，この宝篋印塔の屋根に類似する形式を有するものは，東松浦郡肥前町入野の不動さん境内にある日高大隅守墓と伝えられている天正13年（1585）塔，あるいは三養基郡三根町西島の光浄寺境内にある享禄3年（1530）塔などであって，出土したこの塔婆は室町末期ごろのものであろうと推定される。

〈宝　珠　形〉

五輪塔の風輪・空輪の部分が１個出土している。風輪の部分は高さ８cm・幅14cm，空輪の部分は高さ 7.5cm，幅14cmで，形式からみて江戸時代前期ごろの所産であろうと考えられる。

(3) そ　の　他

〈貨　幣〉

寛永通宝３・乾隆通宝１・不明４，計８個が，２区Dの木炭・灰の堆積土層中から出土した。

〈鋳銅製仏像〉

２区Dから青銅製の鋳銅製仏像が２体出土した。１体は全高 7.8cm，像高 6.5cmの如来坐像で，蓮台上に坐す。右手施無畏，左手を膝上におく。背面は切断されて，頭部と蓮台下に１孔をうがった挿入板が出ている。この仏像は，懸仏の本体であって，鏡板を欠失しているものであり，室町時代の懸仏ではないかと推定される。

他の１体は６手の仏像であるが，保存状態が悪く尊名は明らかでない。蓮台上に坐す坐像であって，全高 4.2cm，像高 3.5cmの小像である。蓮台の下に棒状の枘がでていて，台座があったことを物語っているが，台座は欠失している。この仏像は，一種の念持仏であろうと推定され，江戸時代の作になるものではなかろうか。

〈瓦 〉

平瓦と丸瓦が出土しているが，軒先瓦は２個体分であって，２個ともに宇瓦である。中央に十字，その左右に対称的に３茎唐草文を配している。瓦は，２区Dの木炭・灰の堆積土層中から出土した。

〈煙　管〉

２区Dおよび２区Cから出土している。雁首と吸口の部分であって，銅製である。雁首の曲りの部分が極めて細くなっている点に特徴がみられる。

4. 総　　括

調査の結果，寺坊の遺構を明らかにすることはできなかったが，1区と2区に寺坊が建立されていた可能性が推定される。2区の寺院跡は，天明8年の寺社差出にみえる実相院末寺11寺の中の大門坊跡であることは，ほぼ疑う余地がないが，この大門坊が廃寺となった時期は明らかでなく，江戸時代の末期ごろ火災にあい廃寺となったのではなかろうかということが遺物の出土状態から推定される。この寺は，出土した遺物からみて，室町時代末期の創建ではなかろうかと推定されるが，その廃寺の時期とともに，明らかでない。

この西山遺跡の調査で最も注目されるのは，1区のA・Cおよび3区8の窯跡から出土した土師質の土器である。この土器には椀形の瓦器を伴うが，A・Cの遺物の土師質土器は3区8の窯で焼成されたものであることはほぼ確実であろうと考えられる。この種の土器は，従来も県内からいくらか発見されてはいるが，この遺跡出土のように多数出土したのは最初のことである。しかも，1区Aは鉄分沈澱層の下層から出土し，他の時期の遺物を混入しない限定された一時期の遺物である点において，この土器の年代を推定する資料として注目すべき価値を有しているというべきであろう。

浅鉢形の土師質土器で，底部に板目文を有するのは，鹿島市片山第4号経塚出土の陶製経筒の蓋がある（昭和45年3月20日発行，「佐賀県の経筒」）。また，三養基郡中原町簑原の石井経塚出土の土師質土器も同形式のものではなかろうかと推定される（「石井の経塚」昭和5年3月発行，佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第2輯）。

これらの例からみて，1区A・Cおよび3区8出土の土師質土器は，鎌倉時代ごろに推定される中世土器ではないかと考えられ，今後県内から発見が予想されるこの種土器の標式的なものとして注目される。また，この土器と共伴する椀形瓦器もこの土師質土器と同年代のものであることが推定されるのであるが，この瓦器がどこで製作されたものであるのかは明らかでない。

1区および3区出土の土器は，中世寺院との関係が極めて深いことが考えられ，1区またはその近くに中世寺坊が建立されていた可能性が高いことが推定される。

この遺跡の調査を通じて，中世以降の遺跡の調査は本県においては初めてのことであり，検討すべき問題が多いことが考えられるのであるが，この遺跡から出土した陶器または磁器などを含めて資料を再検討し，今後における中・近世遺跡調査の方向を見出す必要があるということが痛感される。

図　　版

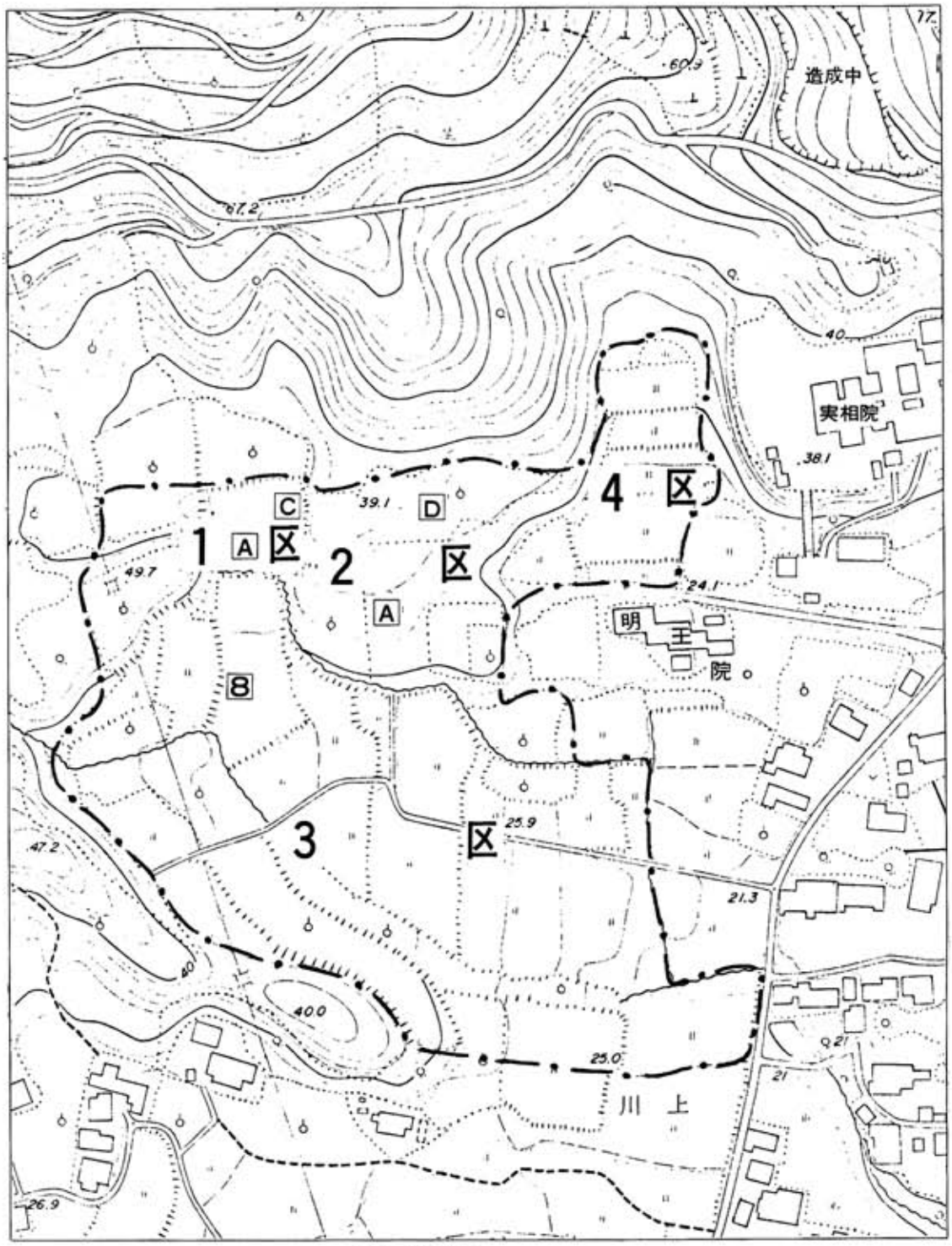
(1) 西山遺跡附近要図

◎ 西山遺跡
△1 銅戈出土地
支石墓所在地
△2 十三塚弥生石棺
△3 コロニー弥生甕棺

① 前隈山・前方後円墳
② 高畠古墳
③ 星隈山古墳群
④ 小隈前方後円墳
⑤ 小隈古墳
⊘ 土師器散布図

1 印鑰社
2 国府推定地
3 総社推定地
4 実相院
5 淀姫神社
6 蔵骨器出土地
7 大願寺廃寺跡

(2) 西山遺跡地形図



—·—·— 調査遺跡

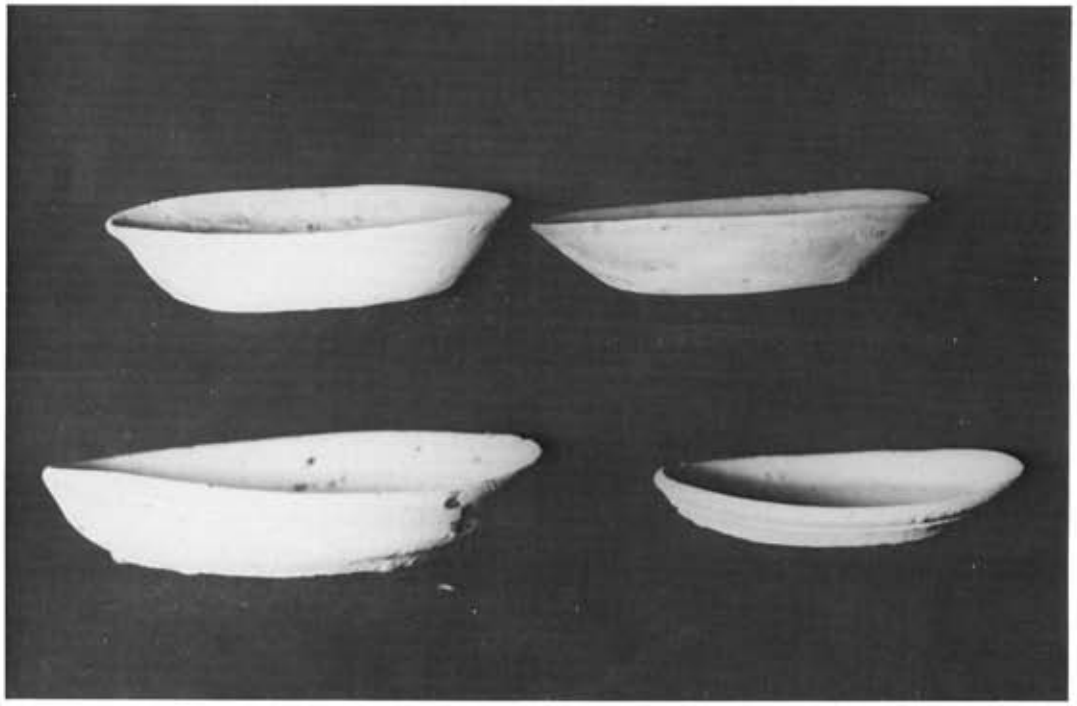
□ 主要遺物出土地

$S = \frac{1}{2,500}$

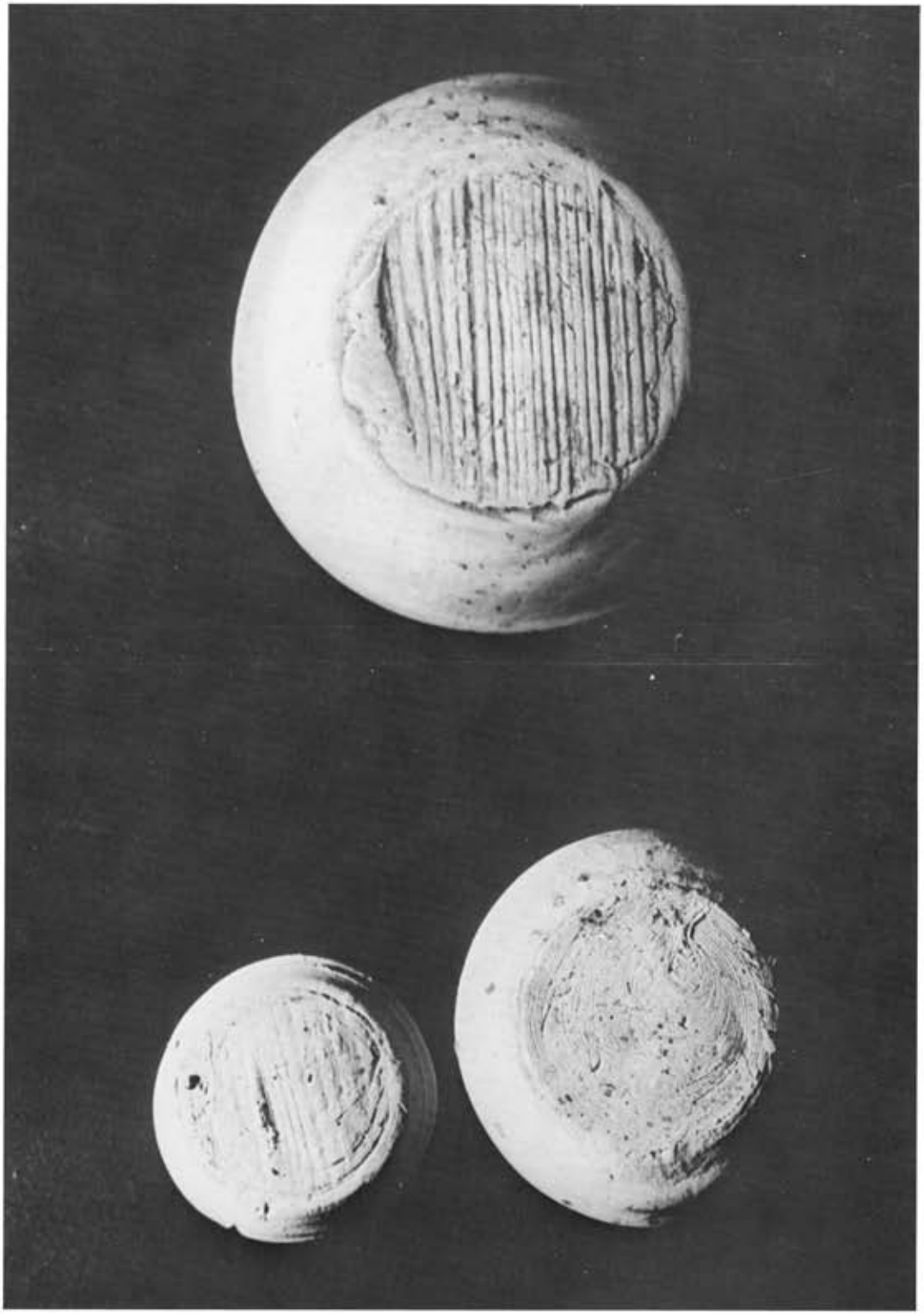
(3) 遺　跡　遠　望（南より）

(4) ２区ＤＴの遺物出土状態

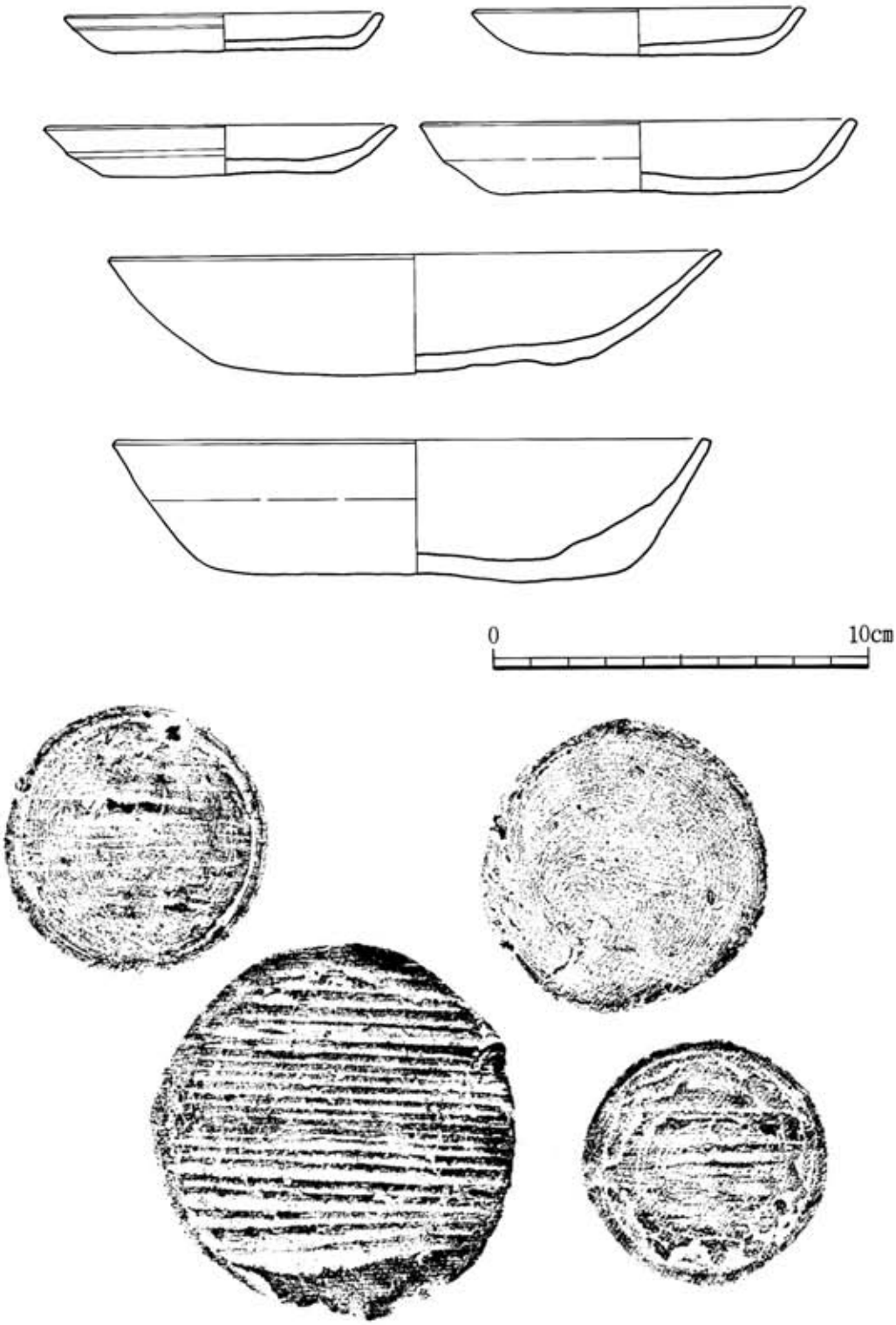
(5) ３区８Ｔの窯跡内土師質土器出土状態



(6) ３区８Ｔ窯跡出土の土師質土器

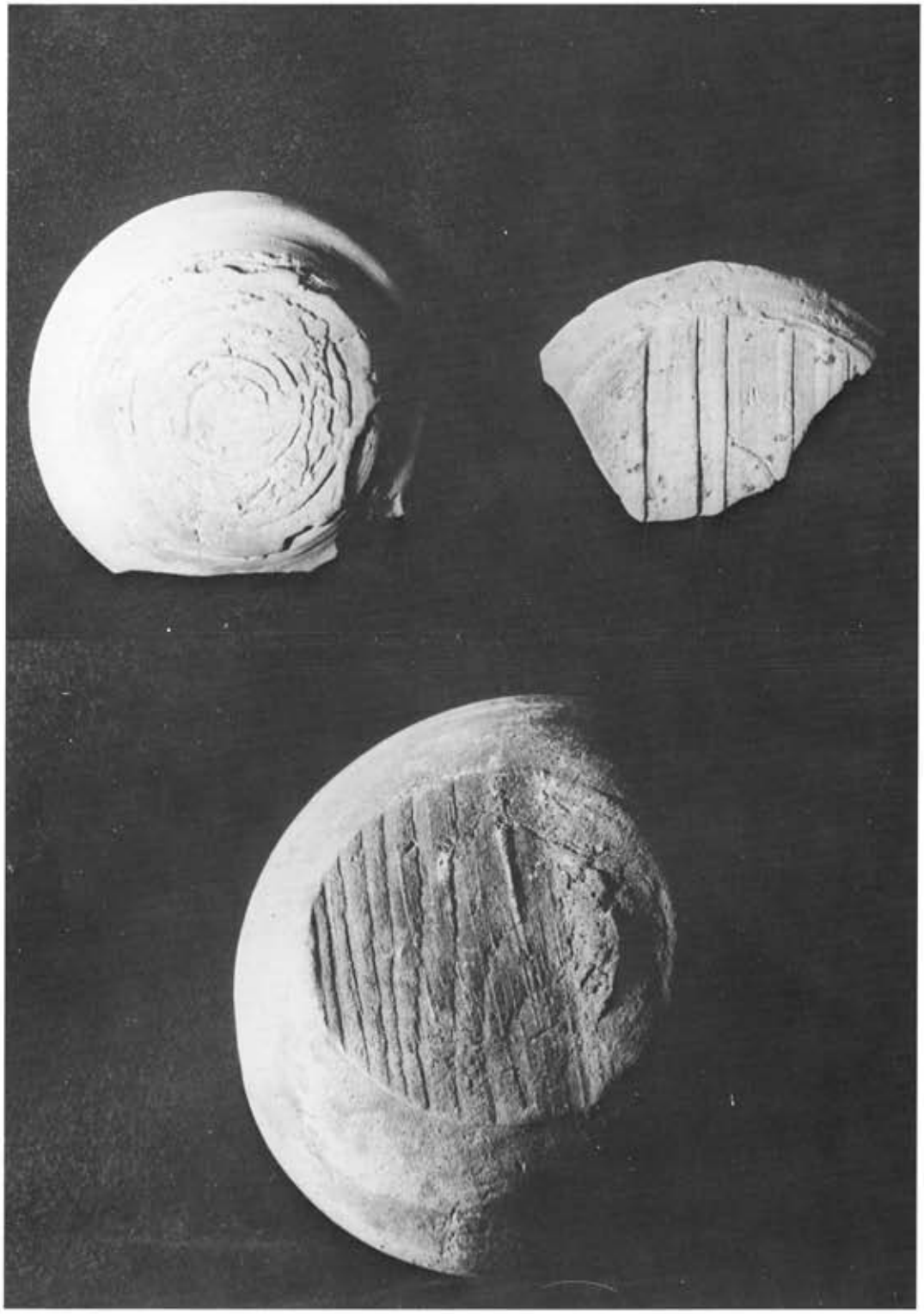


(7) ３区８Ｔ窯跡出土の土師質土器底部

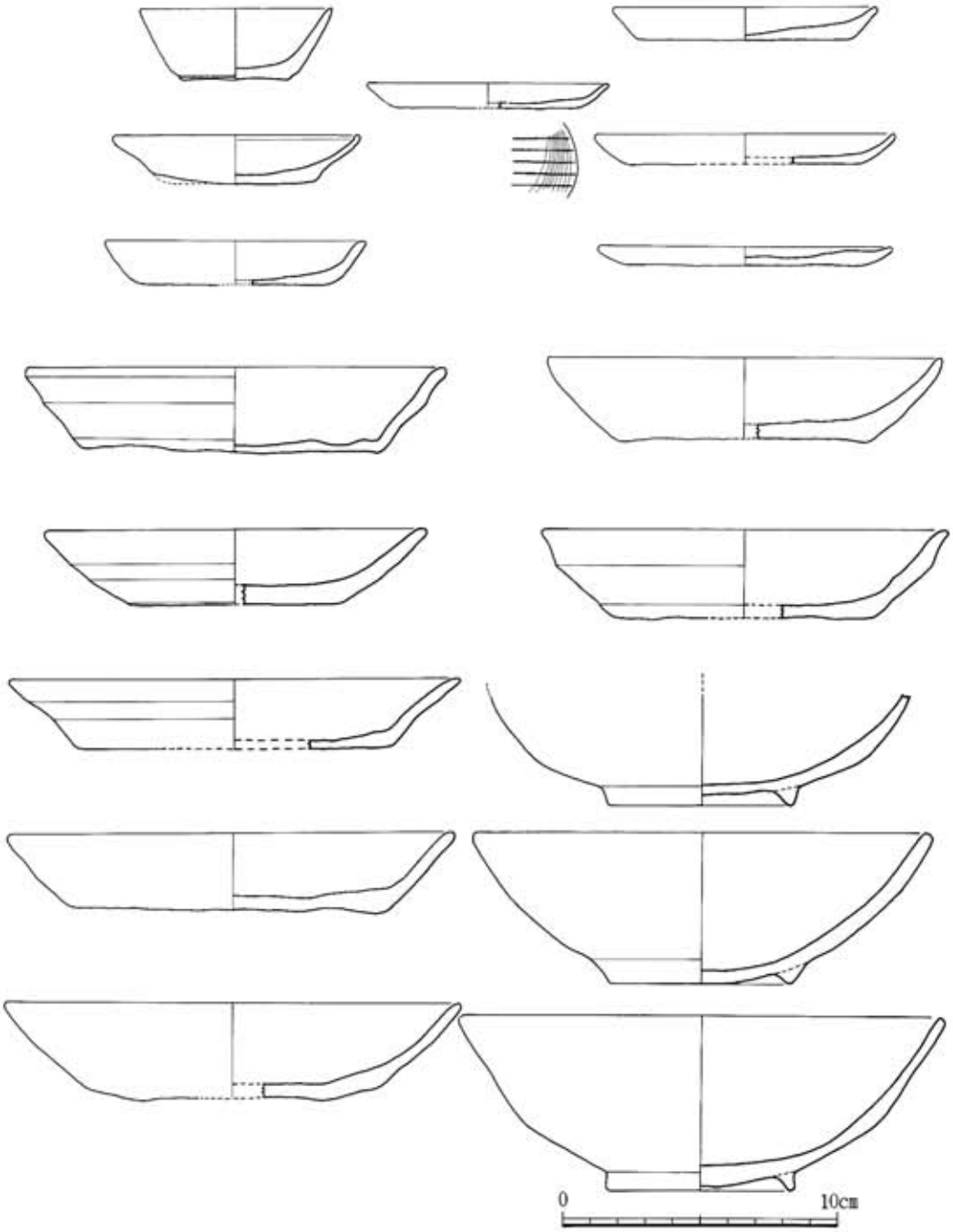


(8) ３区８Ｔ窯跡出土の土師質土器実測図及び底部拓影

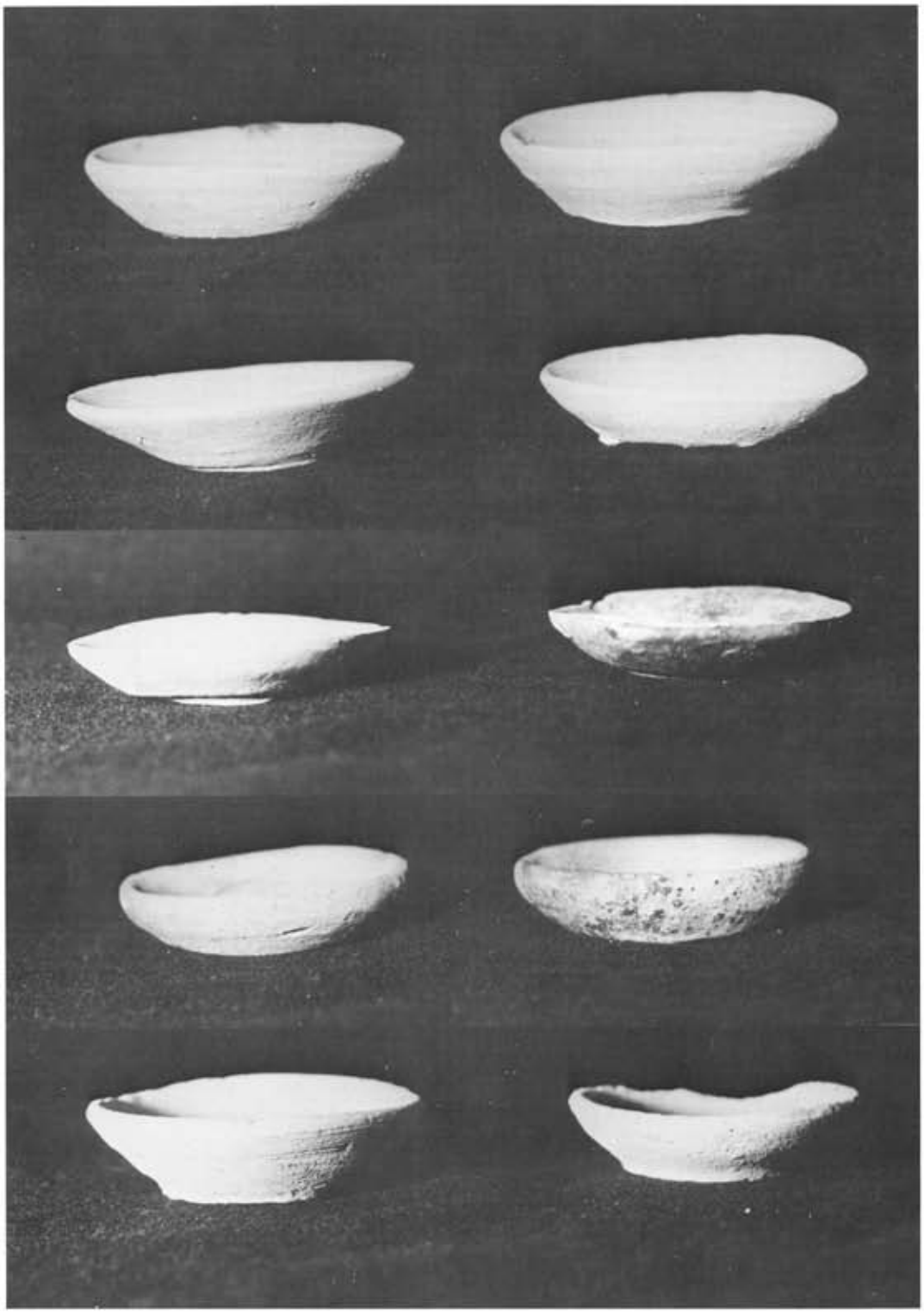
(9) 1区出土の土師質土器及び瓦器（下，1個）



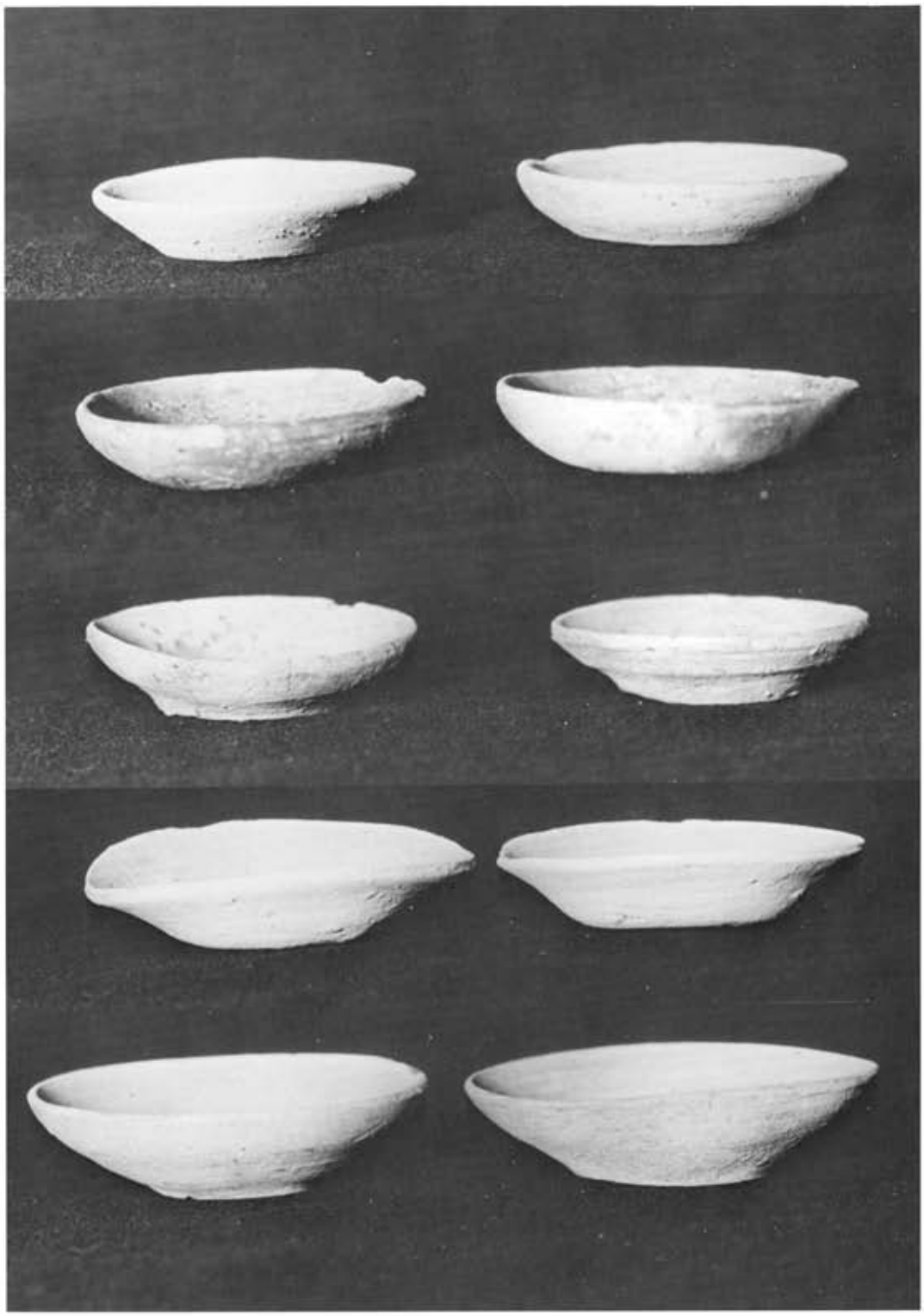
(10) 1区出土の土師質土器底部



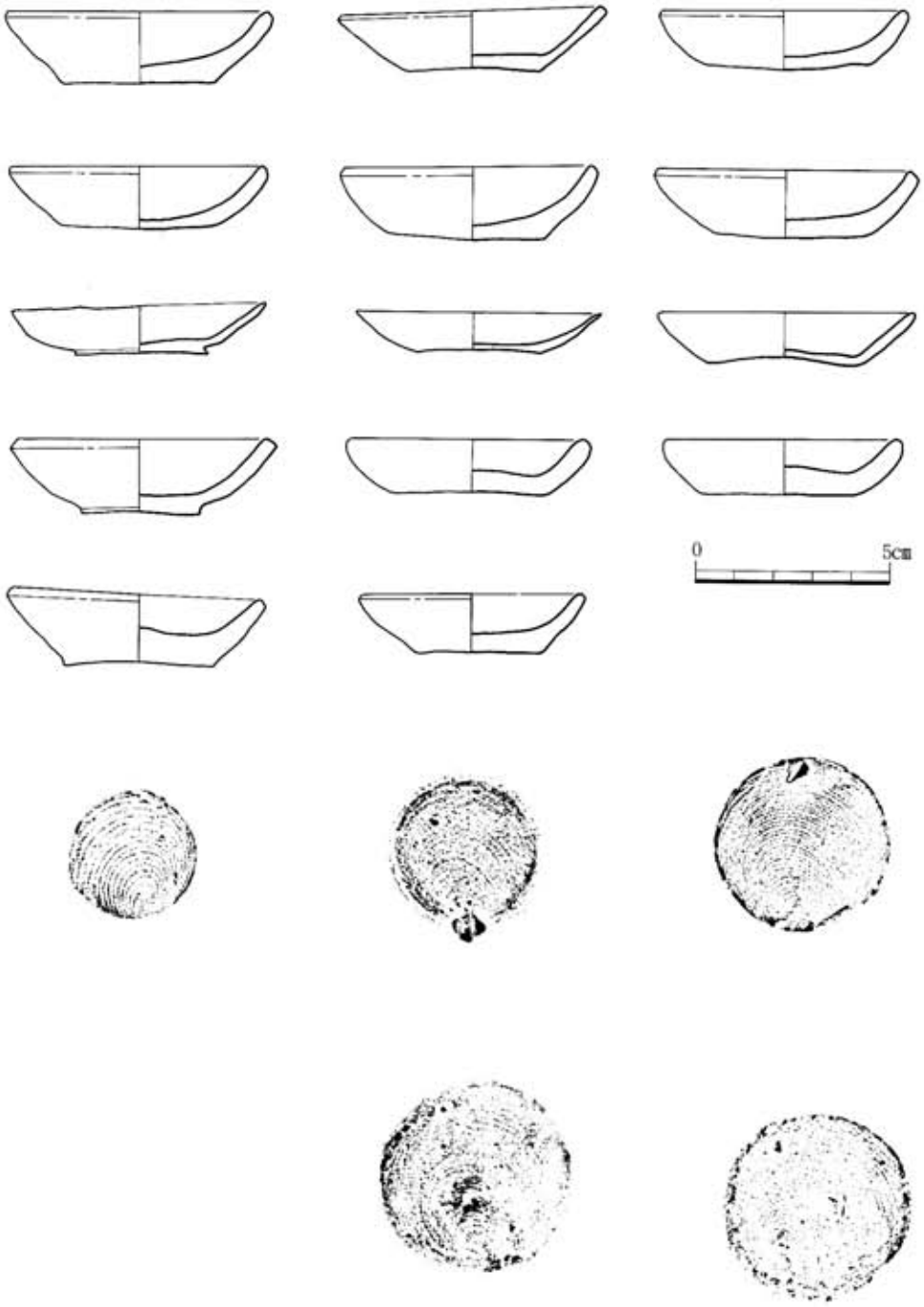
(11) 1区出土の土師質土器及び瓦器（右下，3個）実測図



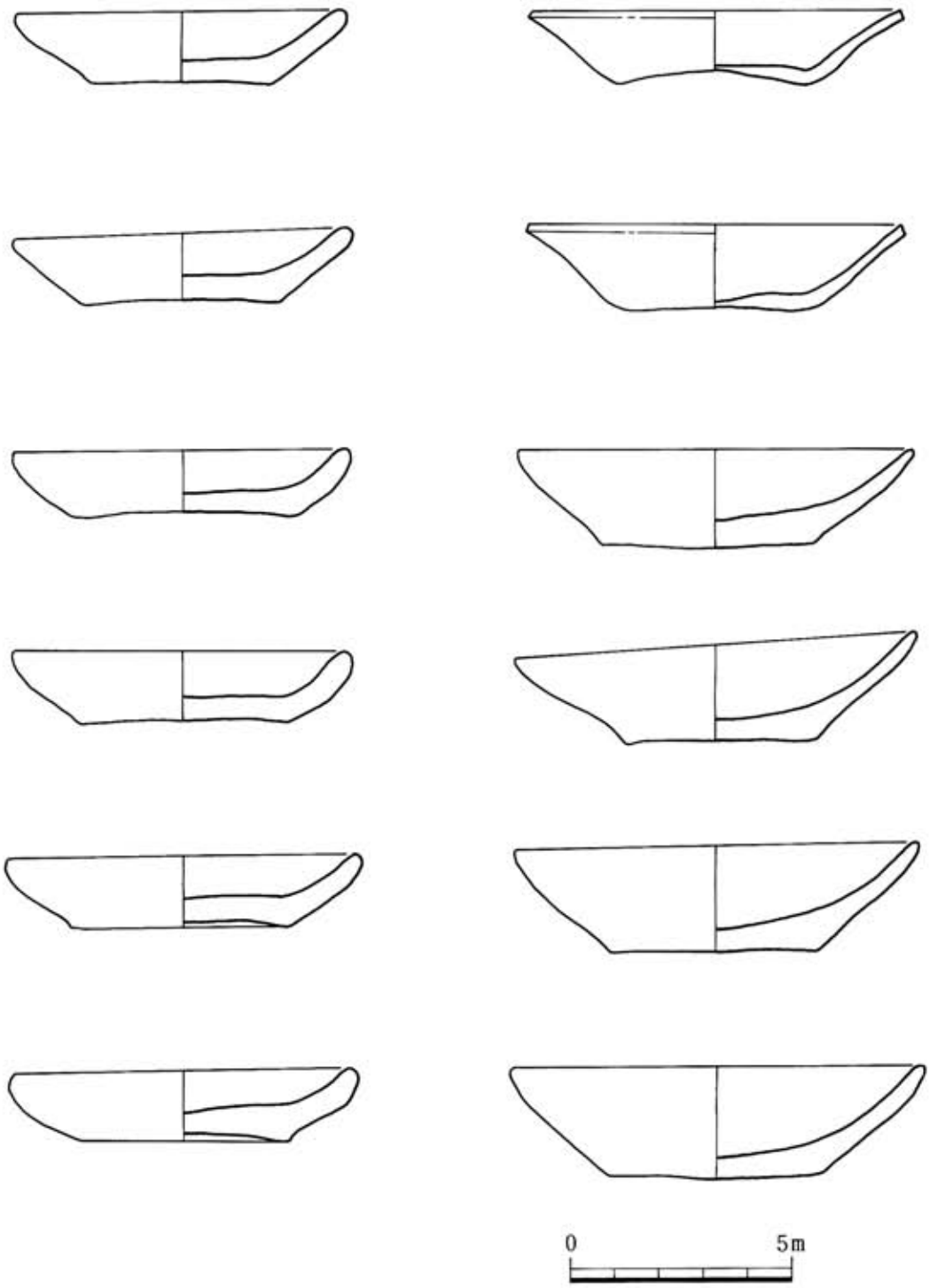
(12) ２区ＤＴ出土の土師質土器 (1)



(13) ２区ＤＴ出土の土師質土器 (2)

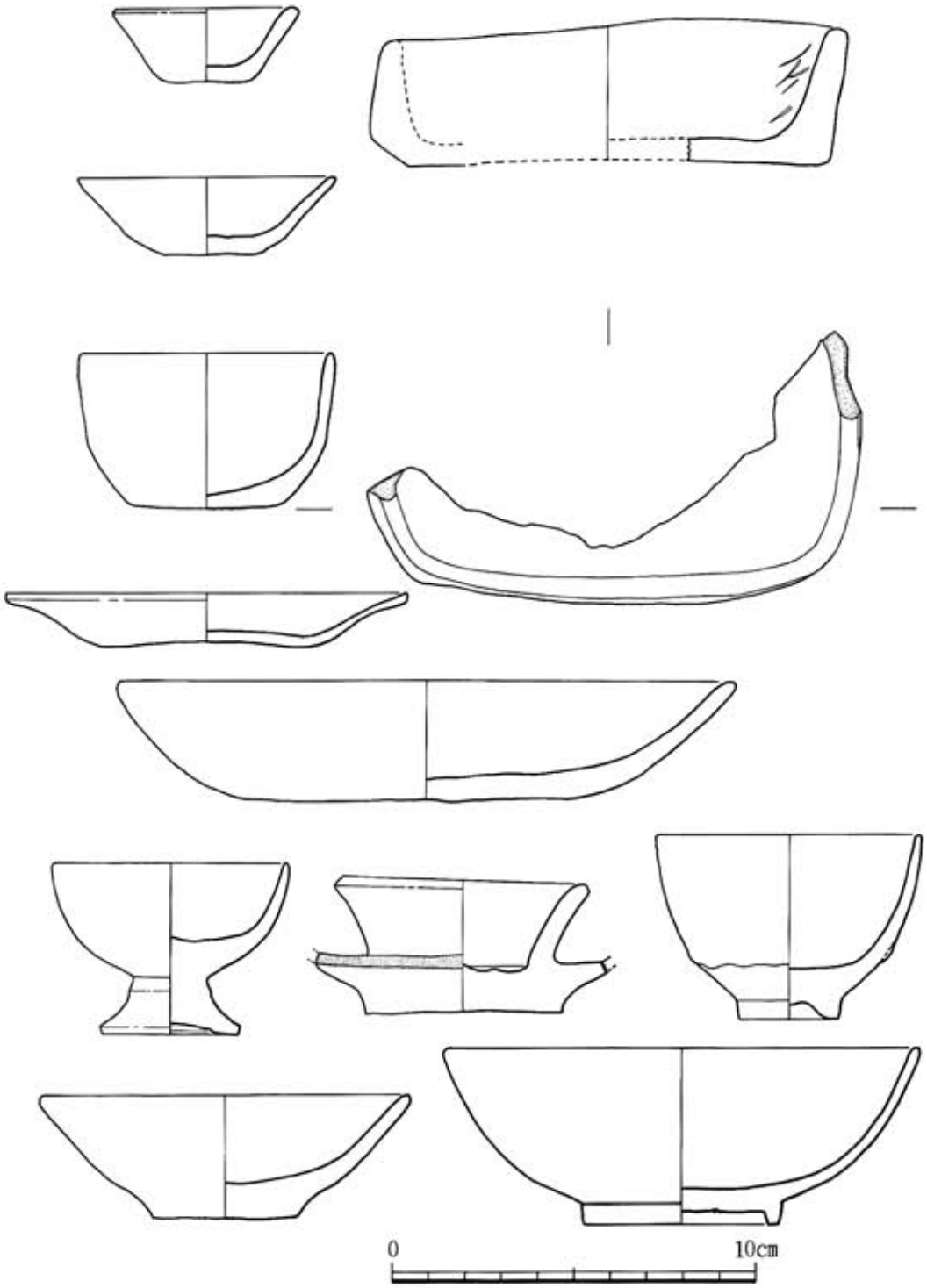


⑭　２区ＤＴ出土の土師質土器実測図・底部拓影

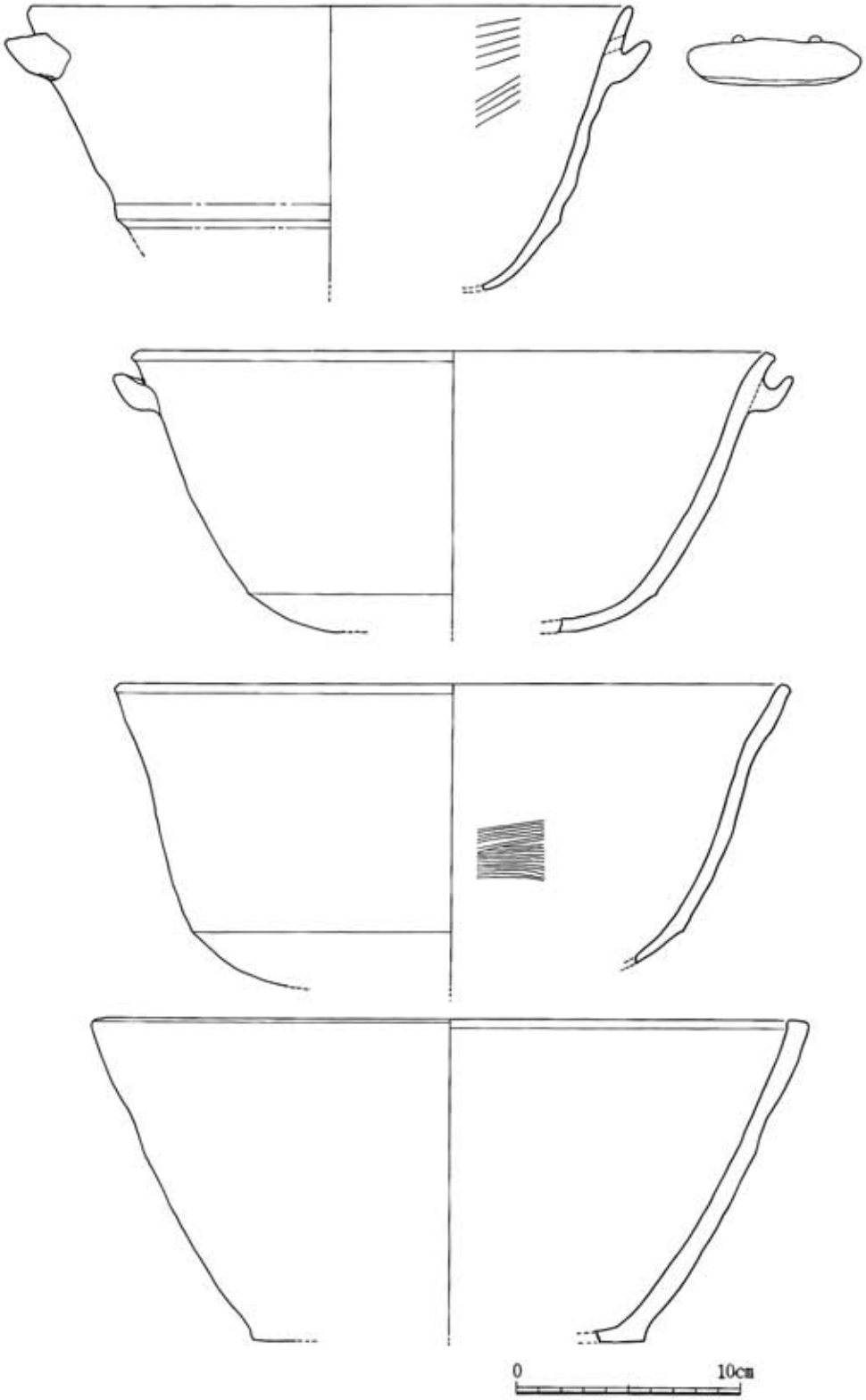


(15) ２区ＤＴ出土の土師質土器実測図

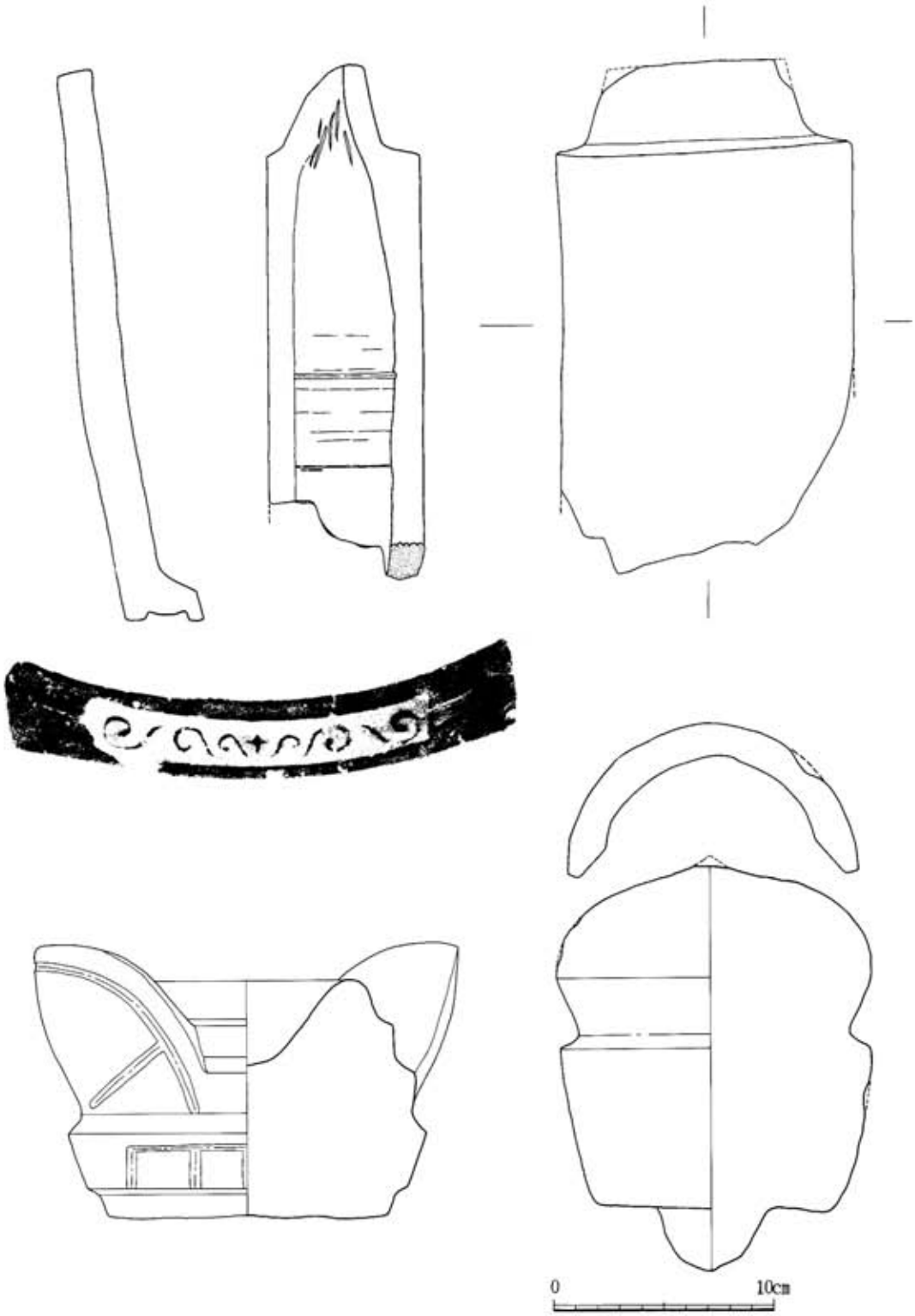
(16) ２区出土の土師質土器及び陶器・磁器



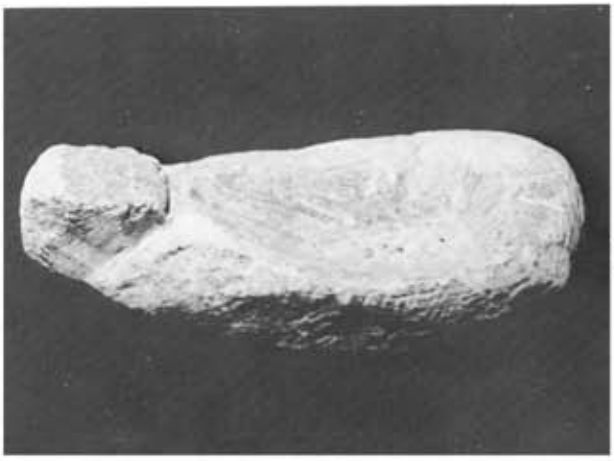
(17) ２区出土の土師質土器及び陶器・磁器実測図



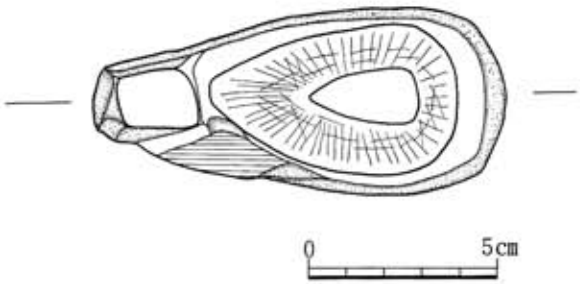
⑱ ２区ＡＴ出土の煮沸用土器実測図



⑲ ２区ＤＴ出土の瓦及び石造物実測図



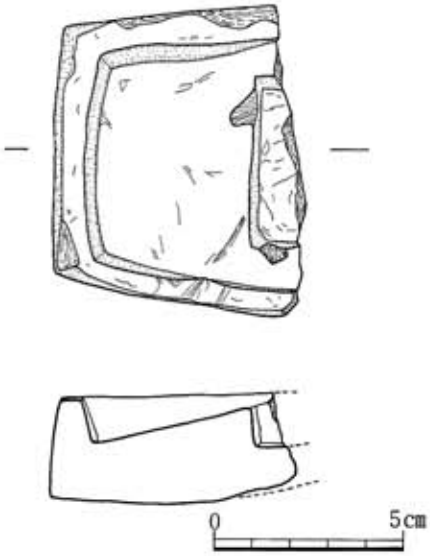
(20) １区ＣＴ出土の滑石製舟形模造品



(21) １区ＣＴ出土の滑石製舟形模造品実測図

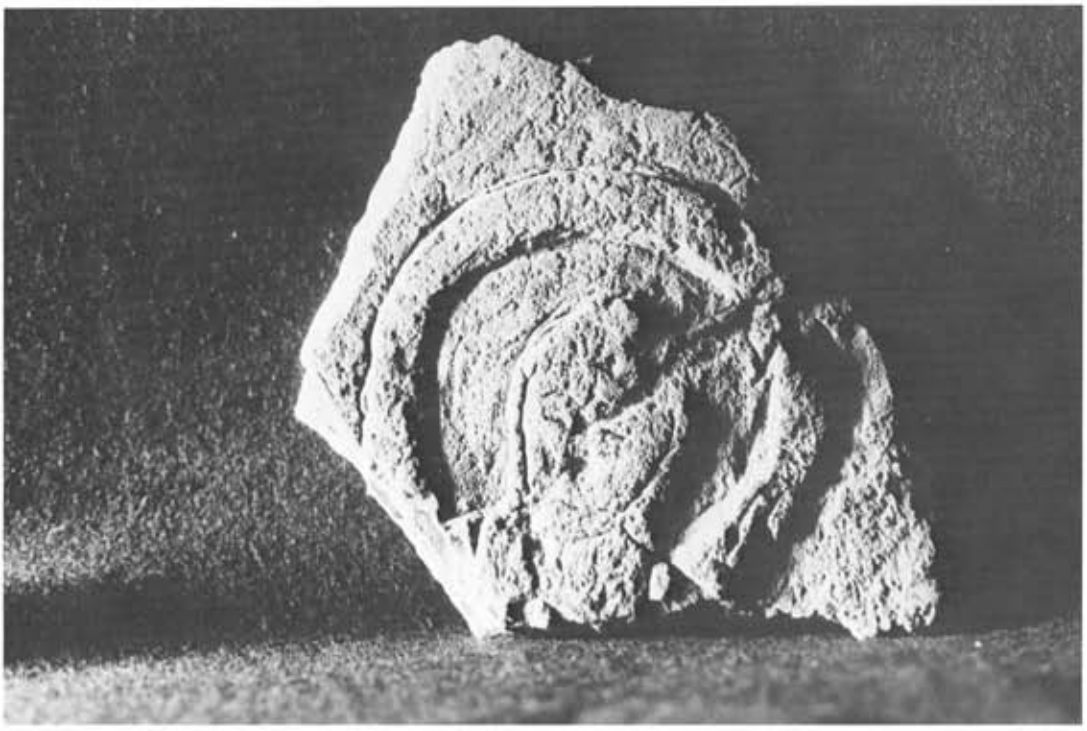
(22) １区ＣＴ出土の滑石製硯

(23) １区ＣＴ出土の滑石製硯実測図



(24) ２区ＤＴ出土の銅造如来坐像

(25) ２区ＤＴ出土の銅造六手仏坐像



(26) ２区ＤＴ出土の滑石製浮彫石仏（破片）

あとがき

この調査概報は，木下之治が執筆し，遺物の実測図は藤井要，写真撮影は木下巧が担当した。

佐賀県文化財調査報告書第28集
佐賀郡大和町
西山遺跡
昭和49年3月20日印刷
昭和49年3月31日発行
編集　佐賀県教育庁文化課
発行　佐賀県教育委員会
印刷　弘文社 ☎ 3－5603